チャンドラキールティの説法について

松　本　恒　爾

はじめに

仏陀のさとり（*bodhi*，菩提）そのものを法身（*dharmakāya*）とし，その法身が説法を行なう物質的な身体（*rūpakāya*，色身）として現れたものを受用身（*saṃbhogakāya or sāṃbhogikaḥ kāyaḥ*）と変化身（*nirmāṇakāya or nairmāṇikaḥ kāyaḥ*）とする三身説は，瑜伽行派（*Yogācāra*）において一つの教理として完成したと考えられる．

この瑜伽行派は，仏陀のさとりを主観（*grāhaka*，能取）と客観（*grāhya*，所取）との相互依存より生じたもの（*paratantra*，依他起）として存在し，主観と客観に分化すること（*abhūtaparikalpa*，虚妄分別）を離れた非概念知（*nirvikalpajñāna*，無分別智）であるとする．

そして，法身にこの非概念知を対応させ，受用身と変化身には，その非概念知が後に再び活動を取り戻した，いわば仏陀の概念知（*savikalpajñana*，有分別智）である後得世間智（*lokottarapṛṣṭhalabdhaṃ laukikaṃ jñānaṃ*）を対応させるのである．

このようであるならば，瑜伽行派は仏陀の認識の存在性によって三身の平等性（*samatā*）を保証し，仏陀の認識である後得世間智を根拠とする受用身と変化身の言語活動（*vyavahāra*，言説）を説法とするのである．

ところが，中観派（*Mādhyamika*）の論師であるチャンドラキールティ（*Candrakīrti*，c.530-600 *or* c.600-650）(1)は三身説を主張しながらも，瑜伽行派を認識論者（*vijñānavādin*）と呼び，ある種の存在論者であるとして次のように批判する．

「ところが一方で，相互依存より生じたものである心と心作用（*cittacaitta*，心・心所）というものごとのみ（*vastumātra*）を承認し，それには［主観と客観とに］分化された性質（*parikalpitasvabhāva*，遍計所執性）はありえないから，存在するという見解を排除する．

さらに，汚染と清浄の根拠であるものには，相互依存より生じたものごとのみは存在しえるから，存在しないという見解を排除する［と，認識論者は主張する］．

［しかし］彼（認識論者）には，［主観と客観とに］分化されたものが現に存在せず，相互依存より生じたものが現に存在しているから，存在する存在しないという二つの見解が起こっている．それ故に，［認識論者に］どうして二つの極端の排除があろうか．

そして，原因と条件より生じたもの（＝相互依存より生じたもの）には，固有のあり方（*svabhāva*，自性）は不合理であることを証明したから，この者（認識論者）の［中道（＝さとり）に対する］解釈は不合理である．それ故に，このように，中論者（＝中観派）の見解においてだけ，存在する存在しないという二つの見解に陥ることがなく，認識論者の見解などにおいては［存在する存在しないという二つの見解に陥ることがないのでは］ない．」

［『明句』（*Prasannapadā*）］(2)

この批判によるならば，仏陀の認識であってさえも，主観と客観との相互依存より生じたものごと，つまり縁起により生じたものごと（*pratītyasamutpannaḥ dharmaḥ*，縁已生法）であるかぎりは，固有のあり方を欠いている（*niḥsvabhāva*，無自性）から，その存在性は否定されることになるだろう．

本稿の目的は，このように仏陀の認識の存在性を否定しながらも，三身説を主張するチャンドラキールティの説法がどのようなものであるかということを明らかにし，その説法について若干の考察を行なうことにある．

1．チャンドラキールティの三身説

まず最初に，チャンドラキールティの三身説を明らかにするために，彼の主著『入中論』（*Madhyamakāvatāra*）第12章における三身についての偈の翻訳を提示し，それに対する解説を行なっていきたい．

この場合，チャンドラキールティ自身による註釈である『入中論註』（*Madhyamakāvatārabhāṣya*）は言うまでもなく，ジャヤーナンダ（*Jayānanda*, c.1150-1200）(3)による『入中論複註』（*Madhyamakāvatāraṭīkā*）も理解の助けとする．

［（1）法身］

「認識対象（**jñeya*，所知）という乾いた薪の余すところなき燃焼から，寂静であるものこそが勝者たち（＝仏陀たち）の法身である．その時，生じることもなく，滅することもなく，心が滅しているから，それ（法身）は［受用身という物質的な］身体として現前する．」

［『入中論』第12章8偈］(4)

この偈において，法身は「［受用身という物質的な］身体として現前する」とされ，また，「心が滅している」ともされている．それ故に，それは物質的な身体ではなく，いかなる概念ももたないのである．(5)

このようならば，仏陀の認識の存在性を否定するチャンドラキールティは，瑜伽行派のように非概念知ではなく，あらゆるものごと（*sarvadharmāḥ*，一切諸法）が縁起（*pratītyasamutpāda*）により成立しており，固有のあり方を欠いていること（*niḥsvabhāvatā*，無自性性），つまり空であること（*śūnyatā*，空性）を法身に対応させていると考えられるのである．(6)

そして，このように法身に空であることを対応させているから，『入中論複註』においては，法身は「ものごとの性質（**dharmatā*, 法性）(7)を本性（**prakṛti*）とする身体が法身である」（＝ *dharmatākāya*）と語義解釈され，また，それは固有のあり方である身体（**svabhāvakāya or *svābhāvikaḥ kāyaḥ*，自性身）と呼ばれているのである．(8)

［（2）受用身］

「寂静な身体（受用身）はカルパ樹のように明らかになり，如意珠のように概念をもたないのである．人々の解脱まで，世間の繁栄のために恒常である．それ（受用身）は言語活動による概念化（*prapañca, 戯論）を離れた者（十地の菩薩）(9)に顕現する．」

［『入中論』第 12 章 9 偈］(10)

先の法身についての偈と解説からも理解されるように，受用身は空であることが物質的なもの（*rūpa*, 色）として現れた説法を行なう身体である．

ところで，瑜伽行派は仏陀の認識として後得世間智の存在性を認めるから，その受用身の「受用」（*saṃbhoga*）という語には，自利（*svārtha*）としての享受と利他（*parārtha*）としての享受という二つの意味があると考えられる．

これら二つの意味のうち，まず自利としての享受とは，概念を駆使した考察により自身がさとりを享受することである．そして次に，利他としての享受とは，高位の菩薩たちを伴う会座（*pariṣanmaṇḍala*）において行なわれる説法を他者が享受することである．(11)

しかし，チャンドラキールティは後得世間智をはじめとする仏陀の認識の存在性を否定し，説法を成立させようとするから，その受用身の「受用」という語には，利他としての享受という意味しかありえないと考えられる．

このことは，この偈において「言語活動による概念化を離れた者（十地の菩薩たち）に顕現する」とだけされることからや，『入中論註』において「このやり方（如意珠やカルパ樹のような受用身のやり方）で衆生利益こそを行ない，設定する」(12)とだけされることからも理解されるだろう．

ちなみに，『入中論複註』においては，「受用」という語に愉悦（**prīti*）と安楽（**sukha*）の経験（**anubhava*, 領受）という自利としての意味があるとされている．

しかし，その自利としての意味は，自身が説法者となり他者に説法できたこととその説法が十地の菩薩たちに伝わったことによるものとされるから，やはり『入中論複註』においても，後得世間智をはじめとする仏陀の認識の存在性を否定する立場がとられていると考えられるのである．(13)

［（2’）等流身］

「聖者の王［たち］（仏陀たち）は，それ（法身と受用身）から流出する一つの物質的な身体において，すでに滅した清らかで汚れのない自身の生涯の余すところなき事績をほんの一時に示す.」

［『入中論』第12章10偈］(14)

この偈においては，法身と受用身という原因とまったく同じ結果（*nṣyandaphala*, 等流果）である物質的な身体，つまり等流身（*niṣyandakāya or naiṣyandikaḥ kāyaḥ*）が説かれている．しかし，これは先行研究である太田［2009］の表現を借りるならば，「受用身としてのある特定の現れ方」がそう呼ばれていると考えてよいだろう.

［（3）変化身］

「さらに，不動の身体（法身）を有するあなたは，［欲界・色界・無色界という］三つの生存状態（**tribhava*, 三有）におもむいて，諸々の変化［身］によって,［兜率天からの］下生,［釈迦族としての］出胎,菩提，寂静なる［法］輪［を転じること］を示す．このように，あなたは，動揺し，弱々しい行いをもち，多くの欲望の縄でつながれた世間の人々を，余すところなく，憐れみ（**karuṇā*, 悲）によって涅槃に導く.」

［『入中論』第12章35偈］(15)

受用身と同じく，変化身は法身が物質的なものとして現れた説法を行なう身体である．しかし，言語活動による概念化を離れた十地の菩薩たちにだけではなく，それ以外の凡夫たちにも現れることにおいて異なる.そして, この身体のモチーフは言うまでもなく, その生涯が八つの事績(16)にまとめられる釈尊（*Śākyamuni*）である.

以上が『入中論』における三身についての偈の翻訳の提示とそれに対する解説である．そして，これらによって理解されるチャンドラキールティの三身説の特徴を述べるとするならば，それは瑜伽行派のように法

身に非概念知という認識的空であることを対応させずに，固有のあり方を欠くという存在的空であることを対応させていることであろう．

このようであるから，チャンドラキールティは，瑜伽行派のように仏陀の認識の存在性によってではなく，あらゆるものごとの共通の特徴（*sāmanyalakṣaṇa*，共相）である空であることによって三身の平等性を保証していると考えられるのである．(17)

2．チャンドラキールティの説法

では次に，以上のような三身説を主張するチャンドラキールティの説法がどのようなものであるかというならば，それは次の『入中論』の偈から明らかになるだろう．

> 「かの［法身の］(18)福徳によって獲得される受用身，さらに変化［身］や空間（**ākāśa*, 虚空）や［それ］以外［の草や木など］(19)から, かの［法身の］(20)威力（**prabhāva or *anubhāva*）によって，何かしらものごとの真実を説示する音声（**śabda*）が生じる．それから世間の人々も真実（**tattva*）を理解する．」
>
> ［『入中論』第 12 章 5 偈］(21)

この偈によるならば，チャンドラキールティの説法とは，瑜伽行派のように仏陀の認識である後得世間智を根拠とする受用身と変化身の言語活動ではなく，法身の威力を根拠とする受用身や変化身の音声であり，またそのような空間や木や石の音声である．ちなみに，『入中論註』においては，この説法を根拠付ける法身の威力は，「［法身たる］如来の加持（**adhiṣṭhāna*）」と呼ばれている．(22)

ここで，仏陀のさとりの境地（*nirvāṇa*，涅槃）と同じく作られたものではないものごと（*asaṃskṛtadharma*，無為法）に属するとされる空間はひとまずおくとしても，草や木などにおいてすら法身の威力を根拠とする音声が認められている．これは何故かというならば，それらが音声を発しうる物質的なものであり，また法身の威力，つまり空であることの力を秘めている空なるものごと（*śūnyaḥ dharmaḥ*，空法）であるからである．

このようならば，あらゆる物質的な空なるものごとには，法身の威力を根拠とする音声としての説法が認められことになるだろう．

そしてこの場合，仏陀は法身としてその威力により物質的な空なるものごとの音声を根拠付けるだけであるから，説法の行為主体（*kartṛ*）として無我（*anātman*）なのである．

さて，このような法身の威力を根拠とする音声としての説法は，チャンドラキールティの独創ではなく，大乗仏教の最初期にその原型を求めることが可能であると考えられる．何故なら，『八千頌般若経』（*Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā*）の古層において，仏陀の威力や加持を根拠とする説法が確認されるからである．以下にそれを含む記述を翻訳し提示してみたい．

この場合，ローカクシェーマ（**lokakṣema*，支婁迦讖）により179年から184年の間に漢訳された『道行般若経』の対応箇所も併記するが，それは翻訳し提示する記述が『八千頌般若』の古層に属することを明らかにするためにである．

・［記述1］：『八千頌般若経』(23)

「さて，その時，世尊はスブーティ長老に告げた．『スブーティよ，菩薩大士たちの智慧の完成（*prajñāpāramitā*，般若波羅蜜）について，すなわち［どのように］菩薩大士たちが智慧の完成に出立していくべきかが，お前に明らかになるように』と．

そうしてそこで，シャーリプトラ長老は次のように考えた．『かの上座スブーティ長老は，自分自身のもつ考察と弁舌の力にもとづいて，自身のもつ考察と弁舌の力を基礎として，菩薩大士たちの智慧の完成を説示するのであろうか，それとも［それは］仏陀の威力（*anubhāva*）によってであろうか』と．

そうしてそこで，長老スブーティは，仏陀の威力によって，長老シャーリプトラのこのような心の思惟，それを心によってこそ察して，シャーリプトラ長老に次のように言った．『長老シャーリプトラよ，世尊の声聞たちが語り，示し，提示し，宣揚し，明らかにし，明確にすることは何であれ，それら一切は如来の主要な活動［の結果］

（*puruṣakāra*［*phala*］，士用［果］）であると理解されるべきである…』.」

・**［記述 1］：『道行般若経』**[24]

佛告須菩提:今日菩薩大會。因諸菩薩故、説般若波羅蜜。菩薩當是學成。舍利弗心念言：今使須菩提爲諸菩薩説般若波羅蜜。自用力説耶。持佛威神説乎。須菩提知舍利弗心所念便語舍利弗言:敢佛弟子所説法、所成法、皆持佛威神。

・**［記述 2］：『八千頌般若経』**[25]

「このように言われた時，神々の王であるシャクラはシャーリプトラ長老に次のように言った.『聖者シャーリプトラよ，聖者スブーティが智慧の完成を語ること，それは誰の威力［のため］であると理解するべきだろうか，誰の加持（*adhiṣṭhāna*）［のため］であると理解すべきであろうか』［と］.

シャーリプトラ長老は答えた.『カウシカよ，スブーティ長老が智慧の完成を語ること，それは如来の威力［のため］であると理解すべきであり，如来の加持［のため］であると理解すべきである』［と］.

さてその時，スブーティ長老は神々の王であるシャクラにシャーリプトラ長老に次のように言った.『カウシカよ，＜聖者スブーティが智慧の完成を語ること，それは誰の威力［のため］であると理解するべきだろうか，誰の加持［のため］であると理解すべきであろうか＞とこのように［汝は］言ったが，私が智慧の完成を語ること，それは如来の威力［のため］であると理解すべきであり，如来の加持［のため］であると理解すべきである』［と］.」

・**［記述 2］：『道行般若経』**[26]

釋提桓因問尊者須菩提：持何威神恩當學知。須菩提言：持佛威神恩當學知。

これらの記述において，声聞であるスブーティが智慧の完成，すなわち

『八千頌般若経』の内容を説示することができるのは，仏陀の威力やその加持を根拠とするからであるとされている．

そして，特に［記述1］ように，説法者であるスブーティ自身の考察と弁舌の力（*prajñāpratibhānabala*）ではなく，仏陀の威力が説法の根拠とされていることは，後得世間智ではなく，法身の威力を説法の根拠とするチャンドラキールティの説法の原型でありうると考えられるのである．(27)

ところで，物質的な空なるものごとは，法身の威力を根拠とする音声としての説法を自ら行なうことはないのである．これは空間や草や木が自ら音声を発することはないことからも理解されるだろう．

では，物質的な空なるものごとは，どのようにして法身の威力を根拠とする音声としての説法を行なうのであろうか．そのことについて，チャンドラキールティは次のように述べている．

> 「例えば，この世で強い力をもつ陶匠が長い間の大変な努力（**yatna*）によって回したろくろは，現在，彼の労力（**prayatna*）が生じないにもかかわらず回り，瓶などの原因として見られるようなものである．」
>
> ［『入中論』第12章6偈］(28)

> 「同じように，現在，生じた労力が存在しないような法を本質とする身体に（**dharmātmake kāye*）こそ住するかの者の［利他ついての］(29)働き（**vṛtti*）は，人の善（**kuśala*）と［仏陀の菩薩であった頃に立てた］(30)特別な誓願（**praṇidhi*）によって引き出される（**ā-* $\sqrt{}$*kṣp*）から，非常に不可思議なものである．」
>
> ［『入中論』第12章7偈］(31)

これらの偈によるならば，仏陀の衆生利益の働き，つまり法身の威力を根拠とする音声としての説法は，物質的な空なるものごとから聞法者である衆生の善と菩薩であった頃に立てた仏陀の誓願によって引き出されるのである．

このようならば，物質的な空なるものごとである仏陀（＝受用身と変化身）は受動的に説法を引き出されるだけであるから，説法という作用

(*kriyā*) について無負担 (*anābhoga*, 無功用) ということになるだろう.

この根拠として,『入中論複註』においては次のような経典が引用されている.

「例えば, ある比丘が木鐸 (**gaṇḍī*) を加持してから, あらゆる認識が滅した精神集中 (**nirodhasamāpatti*, 滅尽定) に入った時, 彼は木鐸の音を聞かずして, 意識せずとも, [あらゆる認識が滅した精神集中から] 立ち上がるようになるようなものである.」

[『海慧菩薩所問経』(**Sāgaramati-nirdeśa or -paripṛcchā*)] (32)

同じく, チャンドラキールティ自身も, 彼の著作『明句』において次のような経典を引用している.

「例えば, 努力して作られた楽器が風に揺り動かされて奏でられる. しかし, この時, 奏者は誰もいないのにもかかわらず, 諸々の音が流れ出るのである.」

「同じように, 過去の [誓願の(33)] 極めて清浄であることから, 一切の衆生の意向で揺り動かされて仏陀の言葉は流れ出る. しかし, ここにはその [仏陀の] 思惟は存在しないのである.」

「こだまなどの音声は, 内的にも外的にも止まらない. そのように人の王 [たる仏陀] の言葉は内的にも外的にも止まらない.」

[『如来秘密経』(*Tathāgataguhyaka*)] (34)

3. まとめ

以上によって, 仏陀の認識の存在性を否定しながらも, 三身説を主張するチャンドラキールティの説法とは, 法身の威力, つまり空であることの力を根拠とする音声であることを明らかにすることができたと考えられる.

このようなチャンドラキールティの説法の最大の特徴は, 大乗仏教の成立以来説かれ続けていたと考えられる仏陀の威力, あるいは加持という様々な奇瑞を起こす仏陀の超自然的な力を, 説法を根拠付ける法身のそれ

として解釈し，自身の教理体系に取り入れたことであろう．

聖典（*āgama*）とともに論理（*yukti*）に基づくことが要求される論書（*śāstra*）の著作者たちにおいて，チャンドラキールティ以外のこのような例を筆者は寡聞にして知らない．(35)

ところで，チャンドラキールティの説法は後得世間智が存在する仏陀が行なう能動的なものではなく，物質的な空なるものごとである仏陀からその誓願と衆生の善によって引き出されるものである．(36)

この場合，仏陀の誓願はすでに立てられ，またすでに達成されたものと考えるならば，衆生の利益である説法が行なわれるか否かは，実際には衆生の善に依存しているということになるだろう．

そして，この説法を引き出す衆生の善をヨーガ（*yoga*，瑜伽）であると考えるならば，それを行なうヨーガ行者（*yogin*，瑜伽者）の目的は，自身の認識を純化（*vyavadāna*）することから，超越者としての仏陀の力を引き出すことへと変質していくのではないだろうか．

もしこのようならば，チャンドラキールティ以降の密教者たちが彼を自身の実践を根拠づける理論の提供者として重要視するようになったのではないかと筆者は推測するのである．

しかし，このことはあくまで推測にしかすぎず，また密教者たちが活躍していたであろう頃に著作された『入中論複註』においても，説法を引き出す衆生の善とは，聞法者となるための特別な福徳（**puṇyaviśeṣa*）とだけしか述べられていないから，(37) さらなる検討が必要であるだろう．

ただ最後に，インド仏教最後の拠点ヴィクラマシーラ（*Vikramaśīla*）の僧院長であったとされ，密教に関する著作を多くの残したアバヤーカラグプタ（*Abhayākaragupta*，c.1050-1100）(38) が，その著作『牟尼意趣荘厳』（*Munimatālaṃkāra*）において，自身の仏身や仏智に対する解釈の根拠としてチャンドラキールティの『入中論』12章の偈を引用していることを指摘して，本稿を終えたい．(39)

〈キーワード〉チャンドラキールティ　三身説　如来の加持

註

（1）チャンドラキールティの年代についてはRuegg[1981] p.71，岸根［2001］pp.26-34を参照.

（2）『明句』：LVP[1903-13] p.274 *l*.7-p.275 *l*.5.

yas tu paratantracittacaittavastumātram abhyupetya tasya parikalpitasvabhāvābhāvād astitvadarśanaṃ pariharati, saṃkleśavyavadānanibandhanasya ca paratantravastumātrasadbhāvān nāstitvadarśanaṃ pariharati, tasya parikalpitasyāvidyamānatvāt paratantrasya ca vidyamānatvād astitvanāstitvadarśanadvayasyāpy upanipātāt kuto 'ntadvayaparihāraḥ / hetupratyayajanitasya ca sasvabhāvenāyuktatvapratipādanād ayuktam evāsya vyākhyānaṃ / tad evaṃ madhyamakadarśane eva astitvanāstitvadvayadarśanasyāprasaṅgo na vijñānavādidarśanādiṣv iti vijñeyaṃ //.

（3）ジャヤーナンダの生存年代についてはvan der Kuijp[1993] を参照.

（4）・『入中論』第一改訂版：P.242a3-4.

shes bya'i bud shing skam po ma lus pa// bsregs pas zhi de rgyal rnams chos sku ste//

de tshe skye ba med cing 'gag pa'ang med// sems 'gag pa de sku yis mngon sum mdzad//.

・『入中論』第二改訂版：D.216b3-4, P.261b7.

shes bya'i bud shing skam po ma lus pa// bsregs pas zhi de rgyal rnams chos sku ste//

de tshe skye ba med cing 'gag pa med// sems 'gag pas de sku yis mngon sum mdzad//.

・『入中論註』：D.331b5-6, P.392a6-7, LVP[1907-12] p.361 *ll*.11-14.

shes bya'i bud shing skam po ma lus pa// bsregs pas zhi ste rgyal rnams chos sku ste//

de'i（LVP[1907-12], P. de）tshe skye ba med cing 'gag pa med// sems 'gag pas（D. pa）de sku yis mngon sum mdzad//.

（5）次のようにチャンドラキールティは心の活動を概念であるとする.

『明句』：LVP[1903-13] p.274 *l*.7-p.275 *l*.5.

「心の活動が概念である．それを欠くから，真実は非概念である．」

（vikalpaś cittapracāraḥ tadrahitatvāt tattattvaṃ nirvikalpaṃ /.）

（6）このような縁起すなわち空であることという関係性は，次の『根本中頌』（*Mūlamadhyamakakārikā*）に基づくことは言うまでもない.

『根本中頌』第24章18偈：Ye[2011] pp. 426-427.

「縁起ということ，それを［我々は］空であることと呼ぶ．それ（空であること）は，［何かしらに］依って仮説されることであり，それこそが中道である．」

（yaḥ pratītyasamutpādaḥ śūnyatāṃ tāṃ pracakṣmahe / sā prajñaptir upādāya pratipat saiva madhyamā //.）

（7）次にように，チャンドラキールティはものごとの性質を空であることとする．
『明句』：LVP[1903-13] p.264 *l*.11-p.265 *l*.1.
「あらゆるものごとにはものごとの本質といわれるものがあるが，それこそかの自己本質である．では，あらゆるものごとのものごとの本質とは何かというならば，あらゆるものごとの固有のあり方である．この固有のあり方とは何かというならば，本性である．そして，この本性とは何かというならば，それはかの空であることである．この空であることとは，固有のあり方を欠いていることである．この固有のあり方を欠いていることとは何かというならば,そのままであること（真如）である．そのままであることとは何かというならば，そのままにあることであり，変化しないことであり，それは常住であることである.」
（yā sā dharmāṇāṃ dharmatā nāma saiva tat svarūpaṃ / atha keyaṃ dharmāṇāṃ dharmatā, dharmāṇāṃ svabhāvaḥ / ko'yaṃ svabhāvaḥ, prakṛtiḥ / kā ceyaṃ prakṛtiḥ, yeyaṃ śūnyatā / keyaṃ śūnyatā, naiḥsvābhāvyaṃ / kim idaṃ naiḥsvābhāvyaṃ, tathatā/ keyaṃ tathatā, taththābhāvo 'vikāritvaṃ saiva sthāyitā.）

（8）『入中論複註』：D.332b3-4, P.401b7-402a1.
「『法身』というのは，ものごとの本質を本性とする身体が法身である．それこそを固有のあり方である身体ともされる．本性とは固有のあり方であり，そのようであるならば，さとりに関する支分（**bodhipakṣa*，菩提分）などのものごとを固有のあり方とし，不生起（**anutpāda*）であり，非虚偽（**akṛtrima*）であり，作られたものではなく（**asaṃskṛta*），出世間道によって獲得されるべきものであり，すべての言語活動による概念化の虚構（*samāropa*，増益）を離れた固有のあり方を欠いていることが，固有のあり方である身体である.」
（chos kyi sku zhes bya ba ni chos nyid kyi rang bzhin gyi sku ni chos kyi sku'o// de nyid la ngo bo nyid kyi sku zhes kyang bya ste/ rang bzhin ni ngo bo nyid yin la des na byang chub kyi phyogs la sogs pa chos rnams kyi rang bzhin skye ba med pa bcos ma ma yin pa 'dus ma byas pa 'jig rten las 'das pa'i lam gyis thob par bya ba spros pa'i sgro btags pa mtha' dag log par rang bzhin med pa nyid ni ngo bo nyid kyi sku'o//.）

（9）『入中論複註』：D.334a6, P.404a2.
「『言語活動による概念化を離れた菩薩』というのは，十地の自在者たる菩薩である.」
（byang chub sems dpa' spros pa dang bral ba zhes bya ni sa bcu'i dbang phyug gi byang chub sems dpa'o//.）
ただし太田［2009］においては，第六現前地以上にある菩薩とされている．

(10) ・『入中論』第一改訂版：P.242a4-5.
zhi sku dpag bsam shing ltar gsal gyur zhing // yid bzhin nor bu ji bzhin rnam mi rtogs//
'gro grol bar du 'jig rten 'byor slad rtag/ 'di ni spros dang bral la snang bar 'gyur//.
・『入中論』第二改訂版：D.216b4, P.261b8.
zhi sku dpag bsam shing ltar gsal gyur zhing (P. cing)// yid bzhin nor bu ji bzhin rnam mi rtog/
'gro grol bar du 'jig rten 'byor slad rtag/ 'di ni spros dang bral la snang bar 'gyur//.
・『入中論註』: D.332a2-3, P.392b3-4, LVP[1907-12] p.362 *ll.*10-13.
zhi sku dpag bsam shing ltar gsal gyur zhing (D. cing) // yid bzhin nor bu ji bzhin rnam mi rtog/
'gro grol bar du 'jig rten 'byor slad rtag/ 'di ni spros dang bral la snang bar 'gyur//.

(11)『大乗荘厳経論』(*Mahāyānasūtrālaṃkāra*) において，受用身は次のように述べられている．
『大乗荘厳経論』第 9 章 61 偈：Lévi[1907] Tome I. p.45 *ll.*8-9.
「一切の［世］界において，受用されるべきもの（＝受用身）は，［聞法者の］集団の包摂と国土と名前と身と法を享受する作用とによって異なる．」
(sarvadhātuṣu sāṃbhogyo bhinno gaṇaparigrahaiḥ / kṣetraiś ca nāmabhiḥ kāyair dharmasaṃbhogaceṣṭitaiḥ /.)

(12)『入中論註』: D.332a5-6, P.392b7-8, LVP[1907-12] p.363 *ll.*5-7.
「それ故に，世間の人々があるかぎり，また空間があるかぎり，仏陀たちはこのやり方で衆生利益こそを行い，設定すると理解されるべきである．」
(de'i phyir 'jig rten ji srid pa dang nam mkha' ji srid pa de srid du sangs rgyas rnams tshul 'dis sems can gyi don kho na mdzad cing rnam par bzhugs (P. LVP[1907-12] bzhags) so zhes bya bar shes par bya'o//.)

『入中論複註』: D.334a5, P.404a1.
「『このやり方で』とは，『カルパ樹や如意珠のやり方で』である．」
(tshul 'dis zhes bya ba ni dpag bsam gyi shing dang yid bzhin gyi nor bu'i tshul gyis so//.)

(13)『入中論複註』: D.333b2-4, P.403a5.
「この場合，説法者 (**śāstṛ*) である自身と法の説示を行なうことにおける愉悦と安楽を経験し，［また］十地の自在者たる菩薩たちが深く広大な法の説示を聞いても，まったく非の打ち所がない法を享受することによる愉悦と安楽を経験すると

いうやり方で享受するから受用である．あるいは，菩薩たちの集団によって享受するから受用である．そのことの原因となるから受用身であるとされ，［三十二］相と［八十］種好に飾られ，自利の完成と利他の円満をなすのである．」
（de la ston pa po bdag nyid dang chos ston par mdzad pa na dga' ba dang / bde ba nyams su myong bar 'gyur zhing sa bcu'i dbang phyug gi byang chub sems dpa' rnams zab cing rgya che ba'i chos bstan pa thos nas kyang mchog tu kha na ma thob med pa'i chos la longs spyod pas dga' ba dang bde ba nyams su myong ba'i sgo nas yang dag par longs spyod pas longs spyod pa'am/ byang chub sems dpa' rnams 'dus nas longs spyod pas na/ longs spyod pa ste/ de'i rgyur gyur bas na longs spyod rdzogs pa'i sku zhes bya ste/ mtshan dang dpe byad rnams kyis mdzes pa dang / bdag gi don phun sum tshogs pa dang / gzhan gyi don phun sum tshogs pa mdzad pa'o//.）

（14）・『入中論』第一改訂版：P.242a5-6.
thub dbang dus gcig kho nar de'i rgyu mthun// gzugs sku gcig la rang gi skye gnas skabs//
sngar 'gags gsal dang ma 'chol byung tshul ni// ma lus kyis bkra mtha' dag ston par mdzad//.
・『入中論』第二改訂版：D.216b4-5, P.261b8-267a1.
thub dbang dus gcig kho nar de'i rgyu mthun// gzugs sku gcig la rang gi skye gnas skabs//
sngar 'gags gsal dang ma 'chol byung tshul ni// ma lus kyis bkra mtha' dag ston par mdzad//.
・『入中論註』：D.332b1-2, P.393a3-4, LVP［1907-12］p.363 *ll*.16-9.
thub dbang dus gcig kho nar de'i rgyu mthun// gzugs sku gcig la rang gi skye gnas skabs//
sngar 'gags gsal dang ma 'chol byung tshul ni// ma lus kyis bkra mtha' dag ston par mdzad//.

（15）・『入中論』第一改訂版：P.243a6-7.
khyod ni srid gsum brgal te mi gYo'i sku las slar yang sprul pa kyis//
gshegs pa dang ni bltams dang byung chub zhi ba'i 'khor lo'ang ston par mdzad//
de ltar khyod kyi 'jig rten gYo bag spyod can re ba'i zhags pa ni//
mang pos bcings pa ma lus thugs rjes mya ngan 'das par bkri bar mdzad//.
・『入中論』第二改訂版：D.218a3-4, P.263b1-3.
slar yang mi gYo'i sku mnga' khyod kyis srid gsum byon nas sprul rnams kyis//
gshegs pa dang ni bltams dang byung chub zhi ba'i 'khor lo'ang ston par mdzad//

de ltar khyod kyis 'jig rten gYo bag spyod can re ba'i zhags pa ni//
mang pos bcings pa ma lus thugs rjes mya ngan 'das par bkri bar mdzad//.
・『入中論註』: D.344b2-4, P.407a2-4, LVP［1907-12］ p.398 *l*.19-p.399 *l*.2.
slar yang mi gYo'i sku mnga' khyod kyis srid gsum byon nas sprul rnams kyis// gshegs pa dang ni bltams dang byung chub zhi ba'i 'khor lo'ang ston par mdzad//
de ltar khyod kyis 'jig rten gYo bag spyod can re ba'i（D. re'i）zhags pa ni//
mang pos bcings pa ma lus thugs rjes mya ngan 'das par bkri bar mdzad//.

(16) 八つの事績には様々なヴァージョンがあるが，（1）兜率天からの下生，（2）マーヤー夫人への入胎，（3）マーヤー夫人からの出胎，（4）出家，（5）降魔，（6）成道，（7）転法輪，（8）入滅（般涅槃）に区分されるものが一般的である．

(17) このようなあらゆるものごとの平等性は，次のような『根本中頌』によっても理解される．
『根本中頌』第 25 章 19 偈，20 偈：Ye［2011］ pp. 458-459.
「輪廻には涅槃とのいかなる差別も存在しない．涅槃には輪廻とのいかなる差別も存在しない．」
（na saṃsārasya nirvāṇāt kiṃcid asti viśeṣaṇam / na nirvāṇasya saṃsārāt kiṃcid asti viśeṣaṇam //.）
「涅槃の際であるものは，輪廻の際である．それら二つにはいかなる細かい区別も存在しない．」
（nirvāṇasya ca yā koṭiḥ koṭiḥ saṃsaraṇasya ca / na tayor antaraṃ kiṃcit susūkṣmam api vidyate //.）

(18) 『入中論複註』: D.331a1, P.399b8.
「『かの』というのは，『法身を本質とする仏陀の』である．」
（de'i zhes bya ba ni/ chos kyi sku'i bdag nyid kyi sangs rgyas so//.）

(19) 『入中論註』: D.331a6-7, P.391b6-7, LVP［1907-12］ p.360 *ll*.1-4.
「虚空や草や木や壁や石などの他のものから，その威力による何かしらの声が生じて，それからも世間の人々は真実を理解する．」
（nam mkha' dang（D. dag）gzhan rtswa（LVP［1907-12］, P. rtsa）dang shing dang rtsig pa dang brag la sogs pa las de'i mthus sgra gang zhig 'byung ba de las kyang 'jig rten gyis（LVP［1907-12］, P. gyi.）de nyid rig pa yin no//.）

(20) 『入中論複註』: D.331a3, P.400a2-3.
「『かの威力［によって］』とは，『法身を主要（**adhipati*）として』である．」
（de'i mthus zhes bya ba ni chos kyi sku'i dbang gis so//.）

(21) ・『入中論』第一改訂版：P.241b8-242a1.
de yi longs spyod rdzogs sku bsod nams kyi// zin dang sprul pa la gzhan las de'i mthus//

sgra gang chos kyi de nyid ston 'byung ba// de las 'jig rten gyis kyang de nyid rig/.

・『入中論』第二改訂版：D.216b1, P.261b4-5.

de yi longs spyod rdzogs sku bsod nams kyis// zin dang sprul pa mkha' gzhan las de'i mthus//

sgra gang chos kyi de nyid ston 'byung ba// de las 'jig rten gyis kyang de nyid rig/.

・『入中論註』：D.331a1-2, P.391a8, LVP[1907-12] p.359 *ll.*2-5.

de yi longs spyod rdzogs sku bsod nams kyis// zin dang sprul pa mkha' gzhan las de'i mthus//

sgra gang chos kyi de nyid ston 'byung ba// de las 'jig rten gyis kyang de nyid rig/.

(22)『入中論註』：D.331a4, P.391b3-4, LVP[1907-12] p.359 *ll.*2-5.

「その福徳により生じたものから（＝受用身）生じた如来の加持による何かしらの声….」

（bsod nams brgya（[LVP[1907-12] [b]rgya, P. rgya.] las bskrun pa de las（D. *omits* de las.）de bzhin gshegs pa'i byin gyi rlabs（LVP[1914], P. gyis brlabs）kyis（D. kyi）sgra gang zhig 'byung ba….）

『入中論複註』：D.331b1-2, P.400b2-3.

「『如来の加持によって』とは，『法身の加持［によって]』である.」

（de bzhin gshegs pa'i byin gyi rlabs（P. gyis brlabs）kyis zhes bya ba ni chos kyi sku'i byin gyi rlabs（P. gyis brlabs）so//.）

(23)『八千頌般若経』：Vaidya[1960] p.2 *ll.*1-10.

tatra khalu bhagavān āyuṣmantaṃ Subhūtiṃ sthaviram āmantrayate sma "pratibhātu te Subhūte bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ prajñāpāramitām ārabhya yathā bodhisattvā mahāsattvāḥ prajñāpāramitāṃ niryāyur" iti //

atha khalv āyuṣmataḥ Śāriputrasyaitad abhavat / "kim ayam āyuṣman Subhūtiḥ sthavira ātmīyena svakena prajñāpratibhānabalādhānena svakena prajñāpratibhānabalādhiṣṭhānena bodhisattvānāṃ mahāsattvānāṃ prajñāpāramitām upadekṣyaty utāho buddhānubhāvena"^iti // atha khalv āyuṣmān Subhūtir buddhānubhāvenāyuṣmataḥ Śāriputrasya imam evaṃrūpaṃ cetasaiva cetaḥparivitarkam ājñāyāyuṣmantaṃ Śāriputram etad avocat /

"yat kiṃcid āyuṣman Śāriputra bhagavataḥ śrāvakā bhāṣante deśayanty upadiśanty udīrayanti prakāśayanti samprakāśayanti sa sarvas tathāgatasya puruṣakāro veditavyaḥ" / .

(24)『道行般若経』：大正 vol.8 425c7-12.

(25)『八千頌般若経』：Vaidya[1960] p.22 *ll*.17-24.
evam ukte Śakro devānām indra āyuṣmantaṃ Śāriputram etad avocat / "kasyaiṣa ārya Śāriputrānubhāvo veditavyaḥ kasyaitad adhiṣṭhānaṃ veditavyaṃ yad āryaSubhūtiḥ prajñāpāramitāṃ bhāṣate" /
āyuṣmān Śāriputra āha / "tathāgatasyaiṣa Kauśika anubhāvo veditavyaḥ / tathāgatasyaitad adhiṣṭhānaṃ veditavyaṃ yad āyuṣmān Subhūtiḥ prajñāpāramitāṃ bhāṣate" /
atha khalv āyuṣmān Subhūtiḥ Śakraṃ devānām indram etad avocat / "yat Kauśika evaṃ vadasi ""kasyaiṣo 'nubhāvo veditavyaḥ kasyaitad adhiṣṭhānaṃ veditavyaṃ yad āryaSubhūtiḥ prajñāpāramitāṃ bhāṣate"" iti / tathāgatasyaiṣa Kauśika anubhāvo veditavyaḥ tathāgatasyaitad adhiṣṭhānaṃ veditavyaṃ yad ahaṃ prajñāpāramitāṃ bhāṣe" /.
(26)『道行般若経』：大正 vol.8 430b17-18.
(27) ただし，法身という語が『道行般若経』の段階において用いられていないことに注意すべきである．
(28) ・『入中論』第一改訂版：P.242a1-2.
'di ltar rdza mkhan stobs ldan pa yis// yun rings 'bad pa ches bskor 'khor lo de// de'i rtsol da ltar skyes pa med bzhin du'ang // 'khor zhing bum pa la sogs rgyur mthong ltar//.
・『入中論』第二改訂版：D.216b2, P.261b5-6.
'ji ltar rdza mkhan stobs ldan pas 'dir// yun rings ches 'bad pas bskor 'khor lo ni// de'i rtsol da ltar skyes pa med bzhin du'ang // 'khor zhing bum pa la sogs rgyur (P. rgyun) mthong ltar//.
・『入中論註』：D.331a7-b1, P.391b8-392a1, LVP[1907-12] p.360 *ll*.9-12.
ji ltar rdza mkhan stobs chen ldan pas 'dir// yun rings (LVP[1907-12] *adds* ches.) 'bad pas ches (LVP[1907-12]. *omits* ches.) bskor 'khor lo ni//
de rtsol da lta (LVP[1907-12] ltar) skyes pa med bzhin du'ang //
'khor zhing bum pa la sogs rgyur mthong ltar//.
(29)『入中論複註』：D.332a2, P.401a5.
「『働き』とは『利他についての働き』である．」
('jug pa zhes bya ba ni sems can gyi don la 'jug pa'o//.)
(30)『入中論複註』：D.332a3, P.401a6.
「『特別な誓願によって』とは，『菩薩の境地で立てた誓願によって』である．」
(smon lam gyi khyad par gyis zhes bya ba ni byang chub sems dpa'i gnas skabs na btab pa'i smon lam gyis so//.)
(31) ・『入中論』第一改訂版：P.242a2-3.
de bzhin da lta skyed stsol med bzhin du// chos kyi bdag can sku nyid la bzhug de'i//

'jug pa gdul bya'i dge dang smon lam gyi// khyad par gyis 'phangs las ches bsam mi khyab//.

・『入中論』第二改訂版：D.216b2-3, P.261b6-7.

de bzhin da lta skyes rtsol med bzhin du// chos kyi bdag can sku nyid la bzhug de'i// 'jug pa skye bo'i dge dang smon lam gyi// khyad par gyis 'phangs las ches bsam mi khyab//.

・『入中論註』：D.331b1-2, P. 392a1-2, LVP［1907-12］p.360 *ll*.13-16.

de bzhin da lta（LVP［1907-12］ltar）skyes rtsol med bzhin du// chos kyi bdag can sku nyid la bzhugs de'i//

'jug pa skye bo'i dge dang smon lam gyi// khyad par gyis 'phangs las ches bsam mi khyab//.

(32)『入中論複註』：D.332a5-6, P.401b1-2.,

de ltar yang 'phags pa rGya mtsho'i blo gros kyis bstan pa las "dper na dge slong zhig/ gaṇḍī（P. gaṇḍi）byin gyis brlabs nas 'gog pa la snyoms par zhugs par gyur na/ des gaṇḍī'i（P. gaṇḍi'i）sgra ma thos shing rtogs par yang mi byed la/ ldang bar yang 'gyur ba yin no" zhes gsungs so//.

ちなみに，この『入中論複註』のテキストから推測される経典名は *Sāgaramatinirdeśa* であるが，漢訳や本経チベット訳から推測される経典名は *Sāgaramatiparipṛcchā* である．

(33)『相疏』（*lakṣaṇaṭīkā*）：Yonezawa［2006］p.159.

「清浄であるのは，過去の誓願がである．」

（śuddhatvaṃ pūrvaṃ praṇidhānaṃ /.）

(34)『明句』：LVP［1903-13］p.366 *l*.9-p.367 *l*.4.（イタリックによる修正は，Yonezawa［2006］p.159 に基づく．）

yathā *yatnakṛtaṃ* tūryaṃ vādyate pavaneritam / na cātra vādakaḥ kaś cin niścaranty atha ca svarāḥ //

evaṃ pūrvasuśuddhatvāt sarvasattvāśayeritā / vāg niścarati buddhasya na cāsyāstīha kalpanā //

pratiśrutkādayaḥ śabdā nādhyātmaṃ na bahiḥ sthitāḥ / vāg apy evaṃ narendrasya nādhyātmaṃ na bahiḥ sthitā //.

(35) 次のように，チャンドラキールティは自身の根本論書（*mūlaśāstra*）である『根本中頌』において聖典と論理が説かれているとするから，彼自身もそれらを意識していなかったわけではない.

『明句』：LVP［1903-13］p.42 *ll*.5-8.（イタリックによる修正は，de Jong［1978］p.32 に基づく．）

「このように教説の意図に通じていないことのために，ある者には『この場合，何

が真実の内容をもつ教説であるのか，では何が意図的な［教説］であるのか』という疑いがあるだろう．ある者は劣った認識であることのために，未完全な内容（未了義）の教説を完全な内容の［教説である］と理解する．それら両様の教化されるべき人の疑惑と誤った認識を，論理と聖典によって排除するにとために，［ナーガールジュナ］師はこれ（『根本中頌』）を著作したのである．」

（yasyaivaṃ deśanābhiprāyānabhijñatayā saṃdehaḥ syāt, kā hy atra deśanā tattvārthā kā nu khalv ābhiprāyikīti / yaś cāpi mandabuddhitayā neyārthāṃ deśanāṃ nītārthām avagacchati, tayor ubhayor api vineyajanayor ācāryo yuktyāgamābhyāṃ saṃśayamithyājñān*ayor a*pākaraṇārtham idam ārabdhavān /.）

(36) 同じ中観派を名乗るバーヴィヴェーカ（*Bhāviveka*）は，次のように『般若燈論』（*Prajñāpradīpa*）において二身説を主張し，説法を行なう変化身は法身から修習と過去の誓願の勢力によって生じるとする．

『般若燈論』：D.241a1-3, P.302a2-5.

「他者における利益と安楽とを成就するだろう最勝心による修習（**bhāvanā*）と過去の誓願の勢力（**vega*）によって，無概念な如来の身からも，一切を利益することを目的として耐える変化身があらゆる場合に生じる．その（変化身）に基づいて，一切の異教徒と声聞と独覚とに共通しない法と人の無我が明らかにされる文字と語と文にしたがった特徴をもつ諸々の言葉が，諸波羅蜜の完全な完成のために，最高の乗によって行くものたちに生じる．それこそが大乗である．」

（de bzhin gshegs pa'i sku rnam par mi rtog pa las kyang / sprul pa'i skus thams cad la phan 'dogs par bzod pa gzhan la phan pa dang / bde ba bsgrub（P. sgrub）pa'i thugs dam gyis yongs su bsgos pa nyid dang / sngon gyi smon lam gyi shugs kyi dbang gis rnam pa thams cad du 'byung ste/ de la brten nas yi ge dang ngag dang tshig rjes su mthun pa'i mtshan nyid kyi gsung chos dang / gang zag bdag med par mu stegs byed dang / nyan thos dang rang（P. *omits* rang.）sangs rgyas（D. *adds.* yin nam sangs rgyas. ）thams cad dang / thun mong ma yin（D. *adds* rnams.）pa gsal bar mdzad pa/ pha rol tu phyin pa rnams yang dag par 'grub pa'i phyir theg pa mchog gis 'gro ba rnams la nye bar 'byung ste/ de ni theg pa chen po zhes bya'o//.）

(37) 『入中論複註』：D. 332a2-3, P.401a5-6.

「『人の善［によって］』とは，『世間の人々の聞法者となる［ための］特別な福徳によって』である．」

（skye bo'i dge dang zhes bya ba ni 'jig rten pa rnams kyi chos nyan par 'gyur ba'i bsod nams kyi khyad par gyis so//.）

(38) アバヤーカラグプタの生存年代については Bühnemann[1991], [1992] を参照.

(39) このことについては別稿を期したいが，『牟尼意趣荘厳』において『入中論』及び『入中論註』が引用される箇所については，とりあえず松本［2014］を参照.

・一次文献
・*Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā*（『八千頌般若経』）：Vaidya［1960］を参照 .
・*Prajñāpradīpa*（『般若燈論』）：東北 No.3853, 大谷 No.5253.
・*Prasannapadā*（『明句』）：LVP［1903-13］を参照 .
・*Madhyāntavibhāgabhāṣya*：Nagao［1964］を参照.
・*Madhyamakāvatāra the first revised of Tibetan translation*（『入中論』第一改訂版）：大谷 No.5261.
・*Madhyamakāvatāra the second revised of Tibetan translation*（『入中論』第二改訂版）：東北 No. 3861, 大谷 No.5262.
・*Madhyamakāvatārabhāṣya*（『入中論註』）：東北 No.3862, 大谷 No. 5263, 及び LVP［1907-12］を参照 .
・*Madhyamakāvatāraṭīkā*（『入中論復注』）：東北 No. 3870, 大谷 No.5271.
・*Munimatālaṃkāra*（『牟尼意趣荘厳論』）：東北 No. 3903, 大谷 No.5299.
・*Mūlamadhyamakakārikā*（『根本中頌』）：Ye［2011］を参照 .
・*Mahāyanasūtrālaṃkāra*（『大乗荘厳経論』）：Lévi［1907］を参照 .
・*Lakṣaṇaṭīkā*（『相疏』）：Yonezawa［2004］-［2013］を参照 .
・『道行般若経』：大正 No.224.

・二次文献
・Bühnemann, Gudrun
1991 : Niṣpannayogāvalī Two Sanskrit Manuscripts from Nepal, Centre for East Asian Cultural Studies.
1992 : "Some Remarks on the Date of Abhayākaragupta and the Chronology of His Works.",Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft 142-1, pp.120-127.
・Cabezón, Ignacio José
1992 : A Dose of Emptiness, An Anotated Translation of the sTong thun chen mo of mKhas grub dge legs dpal bzang, State University of New York Press.
・Dunne, John
1996 : "Thoughtless Buddha, Passionate Buddha.", *Journal of the American Academy of Religion* 65-3 pp.525-556.
・de Jong , J. W.
1977 : Nāgārjuna's Mūlamadhyamakakārikā nāma Prajñā, [The Adyar Library Series vol.109], Adyar Library and Research Centre.
1978 : "Textcritical Notes on the *Prasannapadā*. " : *Indo-Iranian Journal* 20 pp. 25-59, pp.217-252.

・梶山　雄一（Kajiyama Yuichi）
1987 :「空と慈悲」，『哲学研究』334 pp.1-27（『梶山雄一著作集』第四巻　春秋社 pp.351-378 所収）.
・岸根　敏幸（Kisine Toshiyuki）
2001 :『チャンドラキールティの中観思想』，大東出版 .
・la Vallée Poussin, Louis de（=LVP）
1907-12 : Madhyamakāvatāra par Candrakīrti [Bibliotheca Buddhica 9], de l'Académie impériale des sciences（repr. Motilal Banalasidass 1992）.
1903-13 : Mūlamadhyamakakārikās（Mādhyamikasūtras）de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti [Bibliotheca Buddhica 4], de l'Académie impériale des sciences（Reprint. Motilal Banalasidass 1992）.
・Lévi, Sylvain
1907 : Mahāyāna-sūtrālaṃkāra, Exposé de la doctrine du grand véhicle Tome I-II, Librairie Honoré Champion,（Reprint 臨川書店 1983）.
・松本　恒爾（Matsumoto Kōji）
2012 :「*Madhyamakāvatāra-ṭīkā* Chap.12-v.5 和訳研究」, ACTA TIBETICA ET BUDDHICA 5 pp.43-89.
2014 :「*Munimatālaṃkāra* における Candrakīrti について」，大正大学綜合仏教研究所研究年報 36 に所内研究発表要旨として掲載予定.
・長尾　雅人（Nagao M. Gadjin）
1964 : MADHYĀNTAVIBHĀGA-BHĀṢYA, 鈴木学術財団 .
・太田　蕗子（Ota Fukiko）
2009 :「チャンドラキールティの仏身論」，印度学仏教学研究 58-1pp.422-418.
・Ruegg, David Seyfort
1981 : The Literature of Madhyamaka school of Philosophy in India [A History of Indian Literature Vol. VII Fasc.1], Harrassowitz.
・丹治　輝義（Tanji Teruyoshi）
1988 :『中論釈 明らかなことばⅠ』[関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 4]，関西大学出版部 .
2006 :『中論釈 明らかなことばⅡ』[関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 10]，関西大学出版部 .
・Tauscher, Hermut
1989 : Verse-Index of Candrakīrti's Madhyamakāvatāra（Tibetan versions）[Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismskunde Heft 22.] , Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Wien.
・瓜生津　隆真，中沢　中（Uryūzu Ryūshin, Nakazawa Mitsuru）
2012 :『全訳　チャンドラキールティ　入中論』，起心書房 .

Vaidya, P. L.
1960 : Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā [Buddhist Sanskrit Texts No.4], The Mithila Institute.

・van der Kuijp, L. W. J.
1993 : "Jayānanda A twelfth century *Guoshi* from Kashimir among the Tangut", Central Asiatic Journal 34(3/4) pp. 188-197.

・Vose, A. Kevin
2009 : Resurrecting Candrakīrti *Disputes in the Tibetan Creation of Prāsaṅgika*, Wisdom Publications.

・Ye Shaoyong（叶　少勇）
2009 : "A preliminary survey of Sanskrit manuscripts of Madhyamaka texts preserved in the Tibet Autonomous Region", Sanskrit manuscripts in China : Preceedings of a panel at the 2008 Bejin Seminar on Tibetan Studies October 13 to 17, China Tibetology Publishing House pp.307-335 (as collaborator).
2011 :『〈中论颂〉梵藏汉合校・导读•译注』, 中西書局.

・Yonezawa Yoshiyasu（米澤　嘉康）
2004 : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Prasannapadā* (1).", 成田山仏教研究所紀要 27 pp.115-154.
2005 : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Prasannapadā* (2)", 成田山仏教研究所紀要 28 pp.159-179.
2006 : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Prasannapadā* (3)", 成田山仏教研究所紀要 29 pp.135-163.
2007a : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Madhyamakāvatārabhāṣya* Chapter I Revised", Essays on the Sanskrit and Buddhist Culture, Prof. Y. Matsunami's Felicitation Volume presented to him on his seventieth birthday（松濤誠達先生古稀記念　梵文学研究論集）pp.583-598.
2007b : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Prasannapadā* (4)", 成田山仏教研究所紀要 30 pp.203-235
2009 : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Prasannapadā* (5)", 成田山仏教研究所紀要 32 pp.139-155.
2010 : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Prasannapadā* (6)", 成田山仏教研究所紀要 33 pp.125-154.
2011 : "*Lakṣaṇaṭīkā* Tibetan Notes on the *Prasannapadā* Chapter1 (LVP 5.1-36.2)", 成田山仏教研究所紀要 34 pp.125-158.
2012 : "*Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Madhyamkāvatārabhāṣya* Chapter II-V", 成田山仏教研究所紀要 36 pp.69-102.
2013 : *Lakṣaṇaṭīkā* Sanskrit Notes on the *Madhyamkāvatārabhāṣya* Chapter VI, 成田山

チャンドラキールティの説法について

仏教研究所紀要 37 pp.107-175.